



ピッポ新聞

2005
1
No. 195

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500 円
編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
Email pippo@diana.dti.ne.jp

2005年が始まった

空をかついで

肩は

首の付けねから

なだらかにのびて。

肩は

地平線のように

つながって。

人はみんなで

空をかついで

きのうからきょうへと。

子どもよおまえのその肩に

おとなたちは

きょうからあしたを移しかえる。

この重さを

この輝きと暗やみを

あまりにちいさいその肩に。

少しずつ

少しずつ。

(石垣りん詩集「略歴」より)

2004年も押し寄せた12月26日に、詩人の石垣りんさんが亡くなったことを新聞は伝えていた。石垣さんは55歳の定年まで丸の内にある銀行に勤めるかたわら、詩を発表し続け「表札など」「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」

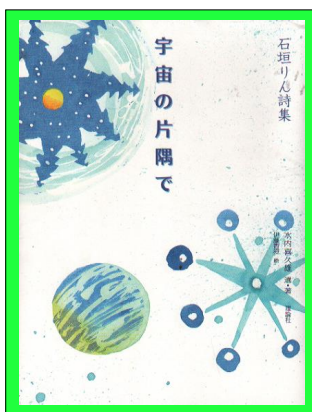
「略歴」「やさしい言葉」(各2100円 復刊・童話屋)などの詩集やエッセイを出版した。その詩は平易な日常の言葉を使い、社会の背景にたいして鋭い批判の目を向けているものが多い。

偶然なのか昨年の最終便の荷物の中に『宇宙の片隅で』(水内喜久夫・選 1470円・理論社)という石垣さんのアンソロジーがあった。その中の詩に、冒頭に掲げた「空をかついで」も入っていた。

その同じ26日、スマトラ沖で巨大地震が発生し、大津波により、周辺諸国に未曾有の被害をもたらした。それは今も続いている。

石垣りんさんは「空をかついで」で、子どものあまりにちいさい肩に「少しずつ 少しずつ 輝きと暗やみを」移していくことを願って詩っているが、時には自然は非情にも、突然子どもの肩に有無を言わず「暗やみ」だけを投げつける。

おもえば、2004年は自然災害が多かった。



詩集「宇宙の片隅で」

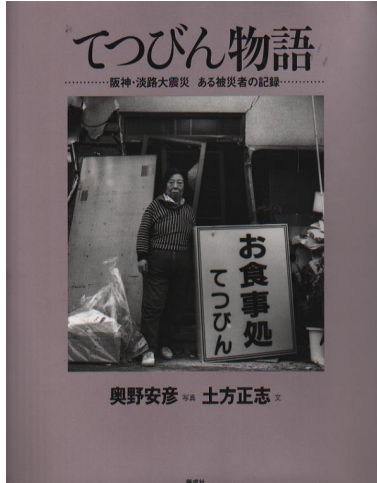
かつてないほどの数の台風が上陸し各地に被害をもたらした。さらに、10月には中越地震が新潟県を襲った。

自然災害はある意味で、人智をもつてしても避けがたい点多いのだが、人間のいとなみによる結果の急激な地球温暖化が、自然災害をふや

し、あるいはその被害を甚大にしていることは疑う余地の無いことである。急激な地球温暖化の主要因は大量のエネルギー消費の結果であるが、その多くは先進国といわれる国の支配者の儲けのためであり、それらの国の人びとの便利な暮らしのためである。しかしながら、被害の多くはこれらの恩恵に浴することの少ない国や地域の人びとに、あるいは社会的弱者により多くのしわ寄せがもたらされるのは何故だろうか。

1995年に起きた阪神淡路大震災からこの1月17日で丸10年。

去年の暮れ『てつびん物語』(奥野安彦・写真 土方政志・文 1890円 偕成社)という本が出た。



この本は、震災の取材で偶然出会った、「てつびん」という居酒屋兼小料理のおばちゃんと著者との交流を通して、被災者が震災後どのような状況に置かれたか、そして、どのように生きたのかを写真と文で伝えてくれるのである。

神戸生まれで神戸育ちの一人暮らしのおばちゃんは地震で家を失った。それをこんな風に話す。

「神戸で家をなくすの、これで3度目や。1度目は戦争の時。2度目は台風や。これで3度目やな。またか」ってなもんや。亡くなった人だつてようけおるんやから、生きとつただけでめつけもんや。よくよしとつたつてはじまらん。こうなつたら死ぬまでりっぱに生きてるわ。まあ、世のなか、なんとかなるもんやで。」

仮設住宅に入ったおばちゃんは、震災から9ヶ月後、プレハブの8人がやつと座れるお店を再開した。お店には以前のお客さんが立ち寄り、おばちゃんの手料理を食べ、飲み集う。仮設住宅に4年暮らしのおばちゃんは高層のりっぱな公営住宅に移った。

おばちゃんには、「巨大な棺桶」にしか写らなかつた近代的な高層の公営住宅を見て、わたしたちは震災は既に過去のものだと考えがちであるが、けつしてそうでないことを、おばちゃんを通じてこの本は伝えてくれる。

何故おばちゃんは病気を押してまで、店を開こうとしたのかをこそ、私たちは考えるべきではないだろうか。おばちゃん

は、人間同士の心のふれ合いこそ求めているのだ。

いまだ老人の一人暮らしの孤独死が続いていることをテレビは伝えている。

「ぼくはこの『おばちゃん』の『こうなつたら死ぬまでりっぱに生きてるわ』と言い、災害にもめげずに、その通りに生きてきたことに、人間の愛おしさを感じずにはいられなかつた。」

私たちの社会が被災者に対して何をしなければならなかつたかを考えさせてくれる一冊である。

自然災害は人智では避けがたい点もあると書いたが、戦争や民族紛争・宗教や政治対立などこそは、人智で終わらせることができるものだろうか。

このところスマトラ沖の巨大地震の報道の陰に隠れたように、イラク戦争の報道が少なくなっているようであるが、2005年イラク情勢はさらに混沌としているようだ。

イラクは今や内乱の様相を帯びてきた。それでもアメリカは何とか形だけでも整えようと今月末の選挙を強行しようとしている。あくまでもアメリカの大義なきイラク戦争の支持を続ける小泉政権は自衛隊の1年間の派兵延長を強行した。

だが、今、自衛隊は彼の地で何をしているのだろうか？一時は金魚の糞のように連なっていた取材陣はだれもサマワからいなくなり、派兵部隊がなにをしているのか国民の目は覆われてしまった。

時々伝わってくるのは自衛隊自身が撮った(大本営発表)「復興支援」で活躍する映像ばかりである。知りたいのは、自衛隊の活動が本当にイラクの人たちに役立つているのかであるのにそれを客観的に伝える人がいない。



「きみが微笑む時」

そんな中、目の再手術のため来日したイラク・ファルージャに暮らす少年、モハマド君の笑顔が心を和ませてくれた。モハマド君はアメリカのファルージャ総攻撃を逃れ、早めに来日したと伝えていた。

どんな戦争でも犠牲になるのは子どもであり老人や女性たちだ。いや、そればかりか戦争は、その地に生きる鳥や小動物、植物など生きとし生けるものすべてを破壊し尽くすのである。誰に問うても、そう、戦争を始めた張本人のブッシュでさえ戦争は反対であると言うことだろう。それなのになぜ我々はこれを止めさせることができないのだろうか……。

さて、こんな悲観的な状況ばかりをなげいていてもしょうがないから、明るい気持ちにさせてくれる本を紹介しよう。去年の11月の終わりに出た。『きみが微

笑むとき』(2940円 福音館書店)という長倉洋海さんの写真集も、人間の素晴らしさを感じさせてくれる本だった。

写真家の長倉さんは20年以上にもわたって、戦乱の地や、民族紛争の地、そしてこれらから逃れてきた難民キャンプ、あるいは未開の地など世界中を飛び回り取材を続けてきた。長倉さんはこれらの地で、人びとの悲惨な状況をのみを伝えるのではなく、そこで懸命に暮らす人の生活の中に入っていく、その日常生活の断片をカメラで切り取って、テレビや新聞では知ることのできない人びとの生の暮らしを私たちに伝えてくれるのである。

この本に出てくる子どもたちの多くは、家畜の世話をし、母を手伝い市場で野菜を売り、働く母にかわって兄弟のめんどうをみ、家事をこなし、工場で働き、農場で出稼ぎの両親を手伝ってコーヒー豆の取り入れを手伝う子たちである。

これらの子どもたちの微笑みや笑顔はほかに「まだまだ世界はすてたもんじやないぞ、未来はなんとかなるんじゃないのかな」という希望を抱かせてくれるのだ。

お終いに、再び石垣りんさんの『宇宙の片隅で』の中から詩を一編。

太陽のほとり

太陽 天に掘られた 光の井戸。

私たち 宇宙の片隅で 輪になって

たったひとつの 井戸を囲んで 暮らします。

世界中 どこにいても 太陽のほとり。

みんな いちにち まいにち

汲み上げる 深い空の底から 長い歴史の奥から 汲んでも 汲んでも 光 天の井戸。

(日本の里には 元日に 若水を汲むという 美しい言葉がありました)

昔ながらの つるべの音が 聞こえます。

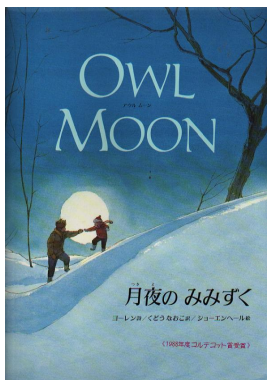
胸に手を当てて ききましよう 生きている いのちの鼓動 若水を汲み上げる 音を。

新年の光 満ち あふれる 朝です。

寒いとき読みたくなる本

『月夜のみみずく』(ヨールン・詩)

どうな おこ・ 訳 ショーエ ンヘル・絵 1260円 (偕成社)



なにもかも氷つく月夜の夜に、父さんと女の子は、森へみみずくを見に出かけた。

女の子は寒さや暗い森へ入っていく不安などを一切我慢してだまって父さんについてゆく。父さんは立ち止まっては何度も、みみずくに呼びかける。すると、とうとうみみずくから・・・自然描写のすばらしさや、女の子の緊張感が文と絵から伝わってきます。一番寒い時期に読みたくなる絵本です。

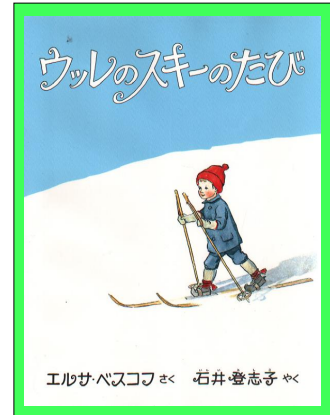
『大雪』（ゼリーナ・ヘンツ・文 アロイス・カリジェ・絵 生野幸吉・訳 2310円 岩波書店）



スイスの山の村の自然を背景にした兄妹のお話。ソリ大会のソリを飾るため、兄のウルスリは妹のフルリーナに毛糸を下の村まで買いにやませます。ようやく手に入れた毛糸を持ってフルリーナは強くなる雪の中を、家

『ウツレのスキーのたび』（エルサ・ベスコフ・作 石井登志子・訳 1500円

フェリシモ出版)



新しいスキーをプレゼントして貰いました。ところが、待てども、今年はなかなか雪が降りません。クリスマス前の2週間前によく降りつ

もりました。さっそく森へスキーで出かけました。そこでウツレは霜じいさんと出会いました。霜じいさんは冬王様の魔法のお城へウツレを誘ってくれました。お城でクリスマスを前にプレゼントの制作にみんなおおいそがし・・・北欧の美しくも厳しい自然のなかで生まれたファンタジー。

『ゆきのおしろへ』（ジビュレ・フォン・オルファース・作 秦理絵子・訳 1575円



平凡社) マリーレンちゃん一人でお留守番をしていると、窓の外では雪の子たちが踊っています。これを見てい

ると雪の子たちが「ゆきの女王のくに」誘います。風の子に引くソリにのって氷のお城に。きょうはお姫様の誕生日、いろいろ楽しく遊びました。でもマリーレンちゃんはお家へかえりたくなって・・・。とても可愛くてきれいなファンタジー絵本 この絵本は1905年というから丁度100年前にドイツで出版された絵本です。ベスコフの「ウツレのスキーのたび」としても筋立てがよくにしていますが、こちらのほうが数年早く出版されたそうです。

『雪わたり』（宮沢賢治・文 堀内誠一・絵 1365円 福音館書店）



ヨーロッパの人たちが冬の白色の森には冬の王様や雪の女王様が住んでいると考えていたようです。我が日本で雪女というのも昔話には出てきませんが、宮沢賢治は真冬のファンタジーに狐を登場させました。この作品で宮沢賢治は狐は騙す。人間は騙されるという一方的解釈を少し訂正したかっただのかな？第一部の自然描写もとても好きです。この本も一番寒い時期に読みたくなる一冊です。